

戦争は嫌だ いつも映画に

平和たぐり寄せる 信じて

世界が平和になるまで、僕は映画で「戦争は嫌だ」と伝えたい。——。がんを公表後も映画を撮り続けている映画作家の大林宣彦さん(81)。戦争と広島原爆がテーマの新作完成を前に、戦時中の体験から作品に込めた思いを語った。

核と を考える

新作は「海辺の映画館―キネマの玉手箱」。尾道の映画館を舞台に、戦争映画を見る若者たちがタイムスリップをして中国戦線や沖縄戦で死を目の当たりにし、原爆投下直前の広島にやって来るという物語だ。

日中戦争さなかの1938年、広島県尾道市に生まれた。父は軍医として日中戦争、続く太平洋戦争で出征。7歳で終戦を迎えた。

僕は軍国少年でした。お国のために死ぬのが美德と教え込まれた。でも本心では国と国との喧嘩なんて嫌だなあ、戦争は嫌だという厭戦の思いをいつか伝えなきゃ、と。映画作家になる原点に「敗戦少年」としての体験があるんですね。

原爆投下の約2週間前、父が広島市内へ行くのに連れられ、原爆ドームの元の姿である産業奨励館を見ているんです。丸い緑の屋根がすごいなあって。投下の数日後、学校の先生から「巨大爆弾が広島に落ちた」と聞く。だから僕にとって原爆ドームは、二重の意味で衝撃的な存在です。

1980年代、「転校生」「時をかける少女」「さびしんぼう」の「尾道三部作」を手がけた。

大林宣彦監督 新作「戦争と広島原爆」テーマ

これまで40を超える作品すべての背景に、僕は「戦争」を描いてきました。たとえば「時をかける少女」は、戦争の時代から時を超えてやって来るというイメージの投影です。一貫したテーマである「純愛」も、戦争で結ばれなかった恋人たちをたくさん見てきたがゆえのモチーフなのです。

東日本大震災後は「戦争三部作」を相次ぎ発表。原発に象徴される経済優先の戦後社会が変わると感じる一方、政治状況に「戦前回帰」の危機感を抱いた。そして2016年、肺がんで余命宣告を受け

「ここから、どうやって真の平和をたぐり寄せるか。世界が平和になるまで、がんごときじゃ死ねない。僕は「庶民のジャーナリズム」である映画で厭戦を伝えていく。映画には未来を交える力があると信じて。それは戦争で生き残った者としての贖罪であり、使命でもあるのです。

原爆はボタン一つで人類を破壊させるでしょ。切迫した世界情勢のいま、平和のために何とかしなきゃと新作に取り組みました。国家権力というものは、過去のあやまちを忘れたら、間違いを繰り返す。だから「決して忘れない」。それが今作に込めた思いです。

広島市で27日開催の国際平和シンポジウム「核兵器廃絶への道」の舞台上上がる。新作のカットから、原爆ドームが登場する場面などを初公開する。映画の公開は戦後75年となる2020年春以降になりそうだ。

いま僕が必要とされるのは、真の平和を求めるみなさんの強い思いがあるからでしょう。戦争はすぐ始まるけれど、平和を築くには時間がかかる。「そのために行けること、あなたならどうしますか」。シンポジウムでは、平和を自分事として考えるヒントをお話ししたいと思います。



11月28日、東京都世田谷区、諫山卓弥撮影

おおばやし・のぶひこ 映画作家。3歳の時に活動写真機で映画を作り始め、大学時代に自主制作映画の道へ。テレビCM制作に携わり、チャールズ・ブロンソン出演の「マンダム」など3千本以上を手がけた。77年、劇場映画デビュー。「異人たちの夏」(88年)、「青春デンデケデケデケ」(92年)などで国内外の映画賞受賞。戦争三部作の最終作「花望(はながたみ)/HANAGATAMI」(2017年)は、撮影直前にがん告知を受けながら完成させた。

27日に国際平和シンポ

国際平和シンポジウム「核兵器廃絶への道」(朝日新聞社、広島市など主催)は27日、広島市の広島国際会議場(平和記念公園内)で開催されます。大林監督は俳優・東ちづるさんとの特別対談「平和の誓いを築きましよう」で登壇。定員450人。聴講希望は郵便番号、住所、氏名、年齢、電話番号を書き、次のいずれかで。はがき(〒530-8211 朝日新聞大阪社会部・平和シンポ係)、メール(hibaku_sha@asahi.com)、ファクス(06-62332-2347)。先着順で聴講券を送ります。

広島平和式典 95カ国参列へ

広島市は10日、8月6日の平和記念式典の概要を発表した。今月8日時点で、95カ

国の代表が参列の意向を示しており、100カ国が参列した2015年に次いで多いという。

市によると、核兵器保有国で参列するの

は、核不拡散条約(NPT)に加盟する英国とフランス、ロシアのほか、パキスタンとイスラエル。欠席は中国とインド。米国と北朝鮮は未回答という。(東郷隆)